



京都大学 総合人間学部 広報

巻頭言

恥知らずの天国	評議員	池田 浩士	2
---------	-----	-------	---

特集 <危機>の時代の学問

危機において求められるもの	人間学科	中西 輝政	4
文学に何ができるか 危機の時代の文学	国際文化学科	岡 真理	5
危機の時代の数学	基礎科学科	高崎 金久	7
火山国・地震国の危機管理	自然環境学科	鎌田 浩毅	9

退官される先生方からのメッセージ

定年退官に思うこと	人間学科	有福 孝岳	11
出逢い	国際文化学科	稲田伊久穂	12
十年一日	基礎科学科	宮本 宗實	13

新任教官紹介

新任のご挨拶	基礎科学科	足助 太郎	14
--------	-------	-------	----

研究・教育活動紹介

哲学的立場と歴史理解	人間学科	富田 恭彦	15
私にとっての3つの物理学	基礎科学科	青山 秀明	16

学部掲示板

教授会報告			17
平成14年度 総合人間学部、大学院人間・環境学研究科公開講座			
世話人 人間・環境学研究科	西井 正弘		21
総合人間学部創立10周年記念 公開シンポジウム(お知らせ)			23

巻頭言

恥知らずの天国

評議員 池田 浩士



京都大学は日本でいちばん汚い大学である。なかでも群を抜いて汚いのが総合人間学部のキャンパスで、これは世界一の汚さを誇っている。

汚いのは、もちろん、汚くする人間たちがそこにいるからだ。この人間

たちをキャンパスから一掃してしまえば、文句なしにそこは綺麗になる。これまでも、キャンパスの美化を推進する試みが何度かなされて、いっそこを汚す人間どもを永久にここから放逐してしまえ、という意見もたびたび出されたのだそう。ところが、そのたびに、「いや、それはいかなものか。先日、28年前に定年退職された名誉教授のQ先生がわたしの研究室を訪ねてみえたが、ああやっぱりこのキャンパスに来ると気持ちが休まります、どうかこの稀少な汚さを末長く保存してください、としみじみ言っておられた」というような、悪質な異論を唱える徒輩が管理機構にも巣食っていて、悪貨は良貨を駆逐するの真理が勝利しつづけてきたのだという。

このキャンパスが汚いのは、そこが活着しているからだ。汗や糞やニキビや抜け毛や爪の垢やカサブタやフケや絶えざるナマ傷などが、すべて生命の証しであるように、立看板やビラや貼紙や落書や騒音や鍵の破壊は、この世界一のキャンパスが活着している証左である。ナチス第三帝国はしばしば「清潔な帝国」と呼ばれるが、それは、ヒトラー政権下のドイツが、いまのイスラエルの一部シオニストたちと同じように、他者の生命を抹殺することによって自分たちの国家社会の清潔を実現しようとしたからだった。

ところが、問題は、ユダヤ人や反対派を抹殺することで清潔さを確保したナチス自身も、自分たちは活着していると思込んでいた、というところにある。つい先日、総合人間学部のある教員が、悲嘆にうちひしがれた面持ちで、こんな体験を披瀝していた。廊下でビラ貼りをしている数人の人物に、「せめてそんなに糊を付けなくて貼ってほしい」という感想を述べたところ、「ビラ剥がしをする小母さんたちに仕事を作ってやってるんだ！」という答えが返ってきたのだそう。

ああここまで頹落が進行したか、この誇るべき汚さがそこまで生命を失ってしまったか、と、その教員は言わなかったが、このわたしは思った。世の中には、いや正確には日本社会には、「日本人が買春ツアーをしてやらなければアジアの某国の人間はもっと貧しくなるではないか」と豪語して恥じない恥知らずがいる。そのビラを貼っていたのは、このキャンパスにも時たま出店を出してくる某政治党派である。仄聞するところでは、その党派は、人間の自己解放＝相互解放の可能性を模索しつづけた思想家・実践家であるマルクスの名を冠した名称を僭称しているのだという。

マルクスが草葉の蔭で泣いているか嘲笑しているか、わたしの知ったことではない。しかし、わたしは年甲斐もなくハラワタが煮え返る。汚さに規準だの努力目標だのがあるわけもない。だが、だからこそ、汚さは、せめて、自分だけのものでもよい、ある誇るべき価値観を持つべきではないのか。

このキャンパスで近頃とりわけ奇異の感を覚えずにいられないのは、歴大な量の自転車を賽の河原の石積みのように並べ直している老人たちの姿だ。自転車で街を乗り回すだけでなく、歩行者を車道に追い落して疾駆するのは、京都の学生の、

いや正確には京都帝国大学生の、特権である。自転車は地球にやさしい交通機関というわけだ。このエコロジー型乗物は、キャンパスでもまた地球にやさしい。だからこそ、退職後のリサイクル老人たちが、若い学生がそこいらに乗り捨てる自転車を一台一台だきかかえては、とても強靱とはいえぬ足腰でよろよろと運んで、きちんと並べてくれる。すると賽の河原の鬼のように学生がやってきては、またメチャクチャに雑ぜ返す。「当たり前ですよ、もしもボクたちがきちんと整頓して自転車を置いてしまったら、この爺さんたち、路頭に迷うことになるだろ？ そんな残酷なこと、ボク、とてもできません。」 だからこそ、このボクは、当節流行のボランティア活動に意欲的に取り組んでいるのである。身体の不自由なお年寄りにたいして、このボクほどやさしい若者はいないのだそうである。

ことわっておくが、自転車老人たちを、自転車に乗るのではなく若い学生が乗り捨てた自転車を整頓するこの老人たちを、リサイクル老人だの、強靱とはいえぬ足腰でよろよろだのと、ここに書いたのは、わたしが学生によりは老人に近いからである。もうすぐわたし自身がリサイクル人生に足を踏み入れるのであり、わたし自身が遠からずよろよろとした足腰を意識せざるをえなくなるからである。とはいえ、わたしがこの自転車老人たちと挨拶を交わしながら思うのは、自分の乗り捨てたものを他人さまに整頓してもらって、いったいこの若者たちは恥ずかしいと思わないのだろうか、ということだ。こんな旧弊な怒りをわたしがいだいてしまうのは、わたしがまだまだ人生修業の足りぬ若造だからだろうか？ それとも、この若者たちのほうがすでに、人生の旅の恥は掻き捨てという老耄の境地に達しているからだろうか？

さきほどちょっと名前を挙げたカール・マルクスは、すべてを商品と化すことによって存立する資本主義の社会がいかに人間を恥知らずにするかを、くりかえし指摘した。ここでいう恥とは、いわゆる世間体を気にする感覚のことではない。人間が自省と自己批判を失うこと、対自的な視線を

喪失し、したがって対他的な視線のリアリティを獲得しえないこと、それをマルクスは恥の意識の欠落として批判したのである。恥知らずというものをマルクスが、すべてを商品と化してしまう社会構造との関連でとらえたことに、注目せざるをえない。商品は、それが自分に買えるものであるかぎり、自分の所有物であり、自分はその主人である。だから、高い授業料を自分の親が支払っており、その親は将来できるだけ高く売るべき商品として自分に投資しているのである以上、商品たる自分も、自分の予定価格にふさわしいアルバイトの収入なり親からの送金なりで、たとえばピラを作るための紙を、どれだけ買い込もうが、どれだけ使おうが、自分の勝手なのだ。自転車整頓の老人たちも清掃の女性たちも、自分が払った授業料で大学が雇ってやっているのだ。

こうして、近ごろは、汚いキャンパスに新種のカサブタがごく普通のものとなった。同一サークルのまったく同一のピラが、同じ壁面のすべてを埋め尽くして、ズラッと張り巡らされるのである。もちろん、別のピラが貼られる余地はまったくなくなる。エコロジストなら、地球資源をどうしてくれるのだ、と言うところだろう。これこそ恥知らずの天国たる京都帝国大学に恥じない景観である。いったい、ピラを創り貼るものももっとも心を砕くはずの、ピラの効果ということ、どう考えているのだろうか。周囲にどれほど巨大などれほど巨額の費用を投入したピラなり広告なりが、どれほど圧倒的な数量で並んでいても、わたしのこのたった一枚の表現こそが人びとの心をとらえるのだ、という誇りなど、この恥知らずな大量商品には、カケラもないのである。あるのは、ピラを見るものの感性にたいする限りない侮蔑であり、紙を大量に買ってやらなければ熱帯雨林だけしか売ることがない某国の人間は生きられないだろう、という恥知らずな驕りでしかない。

世界一汚いキャンパスは、死んではならない。だからこそ、生きかたを考えなければならない。

(国際文化学科 文明論講座 いけだ ひろし)

特集 <危機>の時代の学問

危機において求められるもの



「<危機>の時代の学問」について書くようにと依頼されたのだが、これは大変難しい論題だと思う。というのは、人間が<危機>の到来を感得するのは、おそらく理性によってではないと思われるからだ。危機とは、一言でいえば、人間がな

ぜがわからない理由で環境への適応力を著しく欠いてしまう状態だと私は理解している。そして、その結果が現われたものを「破局」と呼び、危機と破局は別の状態だと区別して考える必要があると思っている。おそらく破局の到来に先駆けて「危機の時代」が存在するのであろう。それは右にゆくか、左にゆくかによって破局が現実のものとなるか否かの分岐路ということである。英語の、まさに「クリティカルな時代」ということになるのだろう。

定義上、「なぜ危機の時代に至ったのか」を知ることが難しい。なぜなら、それがわかれば「危機」ではないということになるし、一般にそれがわかってもその解決方法は、誰が見ても「それだけは選択不可能だ」と思われるものだからだ。それゆえ、なぜ危機が到来したのか合理的に説明することは難しいということになる。

なぜ以上のようなことを長々と書くかと言えば、「危機の時代の学問」は本来、不可能だと言うことを言うためである。もしそれが「危機からの脱出」を目的とするのなら、なぜ危機に至ったかが解明されていなければならないが、人間の歴史は、人間という存在が「解決不能」と思われる問題やその社会の存立の大前提となっている条件を問い直すような問題については、それが「存在しない」ものとして行動する、という抜き難い傾向を有していることを教える。たとえば、今日の環境問題に対する人々の態度の中には、「決して問われない問題」というものが数多くある。今日、

人間学科 中西輝政

環境について「問題」とされているものの多くは、実は「解決可能」と考えられているからこそ取りあげられているものが大半といってもよい。現代の学問の多くが、結局のところ「解決可能」な問題にしか対応しない一層強い性向が生まれている点も大きいのかも知れない。

とすれば、それはむしろ「学問の危機」の進行と言ってもよいのかも知れない。そこで一番大切なことは、おそらく「学問によっても解決できない問題が実は山のようにある」という認識なのであろう。二〇世紀は学問の世界について言えば、「社会科学の世紀」と呼べるかも知れない。人間や社会の問題について、それまでは当然のこととされた、人文的ドキュメンタリーなファクターが占める中心的な位置を「客観」の名の下に大きく脇にズラした。ここでは、自然科学のめざましい発展に幻惑された単純な要素還元主義と共に、「社会性」の強調によって問題の発見よりも、問題の解決が性急に求められてくる。たとえば、アダム・スミスの「モラル・サイエンス」が、いつしかエコノミック・サイエンスとなり、同時にマルクス主義とポジティヴィズム（実証主義）につながり、「政策科学」という名の“学問の危機”へとつながってくる流れがそれに当るかも知れない。

危機の時代の学問のあり方として、結局もっとも重要と思われることは「学問が為しうることはきわめて限られている」という学問の限界を直視する謙虚さ、言い換えれば、モラルと感性の回復ということではないかと思う。危機が到来しつつあると感じられるとき、それは誰の目にも「破局」が意識され始めるときである。したがってそこではまず、破局を身近かに感得しうる感性と、危機の到来にも拘らず「解決不能」として視野の外においてきた問題を敢えて取り上げようとする勇気を自らに課するモラルが学問する人々にも求められるのではないか。

（生活空間論講座 なかにし てるまさ）

文学に何ができるか 危機の時代の文学

国際文化学科 岡 真理



アフリカで子どもが飢えているとき、文学に何ができるか かつてサルトルは問うた。それはまた、かねてより文学研究、とりわけパレスチナ文学に関心を持つ私自身の問いでもあった。パレスチナ人がその人間性の

一切を奪われてあるとき、文学に何ができるのか。たとえば今、イスラエル再占領下のパレスチナで、恒常的外出禁止、地域封鎖、砲撃、爆撃、破壊、流血、殺戮といった例外的状況を日常として生きることを強られる彼ら彼女らの生 「死」と限りなく同義となった「生」 の現実について思うとき、文学研究に携わる者として、文学に何ができるのか、と問わずにはおれない。

2002年4月、戒厳令下にあったヨルダン川西岸の街ベツレヘムには、重度の外出禁止令が敷かれていた。外に出ればパレスチナ人は即、射殺される。人々は自らの家で囚人と化していた。いや、刑期が定まっている分だけ、囚人の方がまだ、とある男性は言った。外出禁止令はいつ終わるとも知れなかった。

外国人であるがゆえに すなわちレイシズムの恩恵を得て 、スナイパーが身を潜める街を視察した。たまたま訪問した家庭で、20代半ばの女性が言った。ずっと家に閉じ込められていると気が狂いそうになります。だから、本を読んだり、部屋を片付けたりして努めて気を紛らわせています……

その言葉には、先の問いに対する一つの答えが おそらくサルトルが予想もしていなかった答えが あった。一冊の小説、たとえそれがハー

レクイン・ロマンスであったとしても、それは、監獄と化した自宅で、不条理極まりない現実を強いられながら、それでもなお正気を保ち、この状況を生き延びる力となるのだということ。

この例外的状況の只中へと私自身が赴くことになったのも、思えば20数年前、パレスチナ人作家ガッサーン・カナファーニーの小説に出会ったことがきっかけだった。パレスチナ難民の生と死を描いた一連の作品を読んだことが、その後、私をアラブ文学研究の道に進ませた。戒厳令下のパレスチナに身を置こうとするのも、非日常的状況を強いられた彼ら彼女らの生の現実に私自身の肉体をさらすことで、カナファーニーの作品を少しでも深く理解したいからなのかもしれない。文学にはそのような力もある。だが、また、文学をめぐる別の状況もある。

同じくイスラエル軍の侵攻に見舞われたラマッラーの街で、作家のリヤーナ・バドルに会った。彼女は、1967年の戦争で難民となり、ヨルダン、レバノン、チュニジアと流浪した末、93年のオスロ合意によって四半世紀ぶりにパレスチナに帰還した。バドルには『鏡の目』という長編小説がある。76年、レバノンのベイルート郊外にあったパレスチナ難民キャンプ、タッル・エル＝ザアタルが半年間にわたって攻囲され、2万人近い住民のうち4000人余りが虐殺された。『鏡の目』は、バドルが7年の歳月をかけて集めた、この事件のサヴァイヴァーたちの証言を、小説の形に再構成したものだ。

「いま、パレスチナで起きていることは、76年にタッル・エル＝ザアタルで起きたことと、まさに、同じものです。作家である私には、今、ここで起きていることを伝える義務があります。けれども、人は例外的状況下にあつてつねに小説家で

いるわけにはいきません。このような状況下では小説は書けません。小説家であっても、ジャーナリストにならざるを得ないのです。」

バドルのその言葉には、小説というものの可能性と不可能性の両方が書き込まれている。小説とは、リアルタイムのレポートではない。小説とは出来事の事後的な再構成であり、そして、出来事を再構成するには、現実を対象化し、その全体像を把握するためのさまざまな距離が必要である。時間的距離、空間的距離、心理的距離……例外的状況を強いる出来事の只中において、その距離を確保することは難しい。タッル・エル＝ザアタル同様、この出来事もまた、必ずや小説として書かれるだろう。だが、それは今ではない。小説はいつも、立ち遅れてやってくる。

例外的状況であればあるほど、小説は書かれ得ない。小説が不可能な状況、それが現在のパレスチナの文学的状況である。

そうである以上、私たちは、今、パレスチナで起きていることを、気まぐれにたまさか放映されるドキュメンタリーの断片を通じてしか、理解する術はないのだろうか。いや、決してそうではないだろう。76年のタッル・エル＝ザアタルと2002年のヨルダン川西岸が同じではないとしても、しかし、封鎖され、包囲され、スナイパーが住民に照準を合わせ、家々は砲撃によって破壊し尽くされ、抵抗勢力は徹底的に殲滅され、女たちが路上で出産し、そうした例外的状況が何ヶ月も続く、そのような現実を生きることを あるいは、そのような現実を死ぬことを 強いられた者たちのその生/死がいかなるものであるかについて『鏡の目』は教えてくれるだろう。76年、タッル・エル＝ザアタルで起きた出来事を描いた作品が今、広く読まれることは、パレスチナ人が過去に被った悲劇について知らしむるだけではない。今、パレスチナで起きている出来事についての洞察と人間的理解をも与えてくれるにちがいない。

タッル・エル＝ザアタルの虐殺を生き延びた難民たちはベイルートにあるほかのキャンプへと四散するが、その6年後の1982年、イスラエル軍がレバノンに侵攻し、その結果、9月の16日から18日にかけて、サブラーとシャティーラの二つの難民キャンプで、住民3000人以上が虐殺された。大半が女性や子ども、老人だった。そして20年後の今、パレスチナではこの2年間に2000人近い人々が殺されている（その4分の1が12歳以下の子どもである）。いずれも「テロリスト」撲滅のためだ。

パレスチナ人の歴史は虐殺の歴史である。数千人規模の虐殺が繰り返し繰り返しパレスチナ人の身に生起する。2001年9月11日、ニューヨークで起きた出来事の犠牲者の死は、それをはるかに凌駕するアフガニスタン市民の死によって贖われたというのに。難民キャンプで、たった42時間のあいだに、数千人パレスチナ人が、家畜のように喉を刃物で切り裂かれて殺されても、彼らの死は、ニューヨークの犠牲者の死のように悲しまれない。あたかもそれがパレスチナ人の宿命であるかのように。あたかも彼らがそのような死を運命づけられてでもいるかのように。

そう、そうなのだ。彼らはすでに私たちの想像力のなかで人間として殺されているのだ。嘘だと思ふなら、問うてみればいい。あなたは「難民」でも「テロリスト」でもない、固有名をもったパレスチナ人の顔をひとつでも生き生きと想起できるだろうか。そして、彼あるいは彼女の夢を想像することができるだろうか。人間とは夢見る存在である。アーイシャの夢を、ホダーの夢を、ヒクマトの夢を、フセインの夢をあなたは思い描くことができるだろうか。

小説において私たちは、固有名をもち、固有の夢をもった一人ひとりの人間に会うことができる。今、その意味はとてつもなく重い。

(文明論講座 おか まり)

危機の時代の数学



本特集の執筆を誰に依頼するかを相談するため広報委員会前委員長の青山秀明先生と電子メールのやりとりをした。その際、特集のテーマについて「危機が叫ばれる時代には、次々に飛び出す一見目新しいアイデアに

振り回されて右往左往するよりも、数学のようにどの時代へ行ってもどの国へ行っても変わらないものに立ち戻って考え直すことの方が有意義ではないか」ということをつぶやいたら、それではその主旨でお前が書け、と言われてしまった。そこで、僭越ながら、並み居る執筆陣に加わってこの深刻なテーマについて（おそらく見当違いなことを）書くことにする。

数学者とて霞を食って生きているわけではないから、さまざまな危機と無縁ではられない。ここではそのような危機の中を生きた数学者エヴァリスト・ガロアについて語りたい。

ガロアは数学史で最も重要な数学者の一人であり、劇的な生涯を送ったことでも知られている。1811年にパリ近郊で生まれたガロアは17歳で本格的な数学研究を開始した。その後エコール・ノルマル（当時は別の名称で呼ばれていた）に入るが、共和派としての政治活動が災いして放校され、一層激しい活動に及んで逮捕・収監された後、1832年決闘に臨んで20歳の若さで死んだ。この間の研究で今日「ガロア理論」と呼ばれるものの基礎を築いた。ガロアの政治活動の時期は、1830年の7月革命でシャルル10世が退位し、代わってルイ・フィリップが即位するが民衆の不満は収まらない、という文字通り政治的危機の時代に重なる。

基礎科学科 高崎 金久

決闘の真相は今日でも不明で、警察と内通した者による謀殺説から、自殺願望をもつガロアが友人に依頼して決闘を偽装したという説に至るまで、諸説入り乱れている。

ガロアの政治活動は当時の政治状況の中で一つのエピソード以上のものではなかった。ガロア自身も数学と政治活動を独立のものと考えていたようである。また、その数学は時代をはるかに先取りするもので、当時はあまり理解されず、理解できる形に整理されて数学者の間に浸透するのにその後数十年を要した。政治活動による時間的制約が数学活動を加速し稠密なものにした、という見方もあり得る。決闘が自身も関与して偽装したものだとなおさらである。決闘前夜に友人のシュヴァリエに宛てて書かれた有名な手紙は他の数学者に向けて今後取り組むべき課題を呈示するものでもあった。

今日ガロア理論と言えは数論や代数学では必要不可欠な存在である。これらは今でも数学の中で最も「純粋数学」的な分野であるが、ガロアの研究はそれに先立つガウスやアーベルの研究と並んでこの分野の新たな基礎を築くものだった。しかしパリの科学アカデミーは提出されたガロアの論文を正しく評価できず、あげくに論文を「紛失」した（同じことがアーベルの場合にも起こった）。もともと科学アカデミーでは大革命以前からの伝統として力学・確率論・熱理論などの「応用数学」やそれらと近縁関係にある解析学が大きな勢力を占めていて、ガロアの研究を受け入れる環境ができていなかった。

この最も純粋数学的に見えるガロアの研究の一部が今ではデジタル技術や暗号技術に応用されている。我々は何気なくCDプレーヤーで音楽を聴き、DVDプレーヤーで映像を楽しんでいるが、

その技術的基盤の中にこのような数学的成果が活かされているのである。もっとも、応用数学（その筆頭であるフーリエの研究もCDプレーヤーに活用されている）に固まった科学アカデミーに冷たくあしらわれたガロアが今それを素直に喜ぶとも思われない。

ガロアの研究は一種の「パラダイムシフト」をもたらしたわけだが、ここで注意しておきたいのは、数学のパラダイムシフトが問題意識や方法論において起きるものであって、知識体系が交代することによるのではない、という点である。数学的知見は証明が正しければ（ガロアの不幸は当時の人たちにそれが確信できなかったことにある）既存の体系に新たな知識として加えられるが、過去に蓄積された知識は原理的にそれと矛盾しないのでそのまま生き残る（時折多少の手直しが必要になることも事実だが）。数学はこのようにして過去数千年間に積み上げられた単一の知識体系である。互いに相容れない学説が対峙して縄張りを張ることで成立するような学問とは性格が異なるのである。数学の学問的基盤は人類共通であり、何をどのように研究するか、というところでお互いに競い合う。

ガロアの研究が後に思いがけない形で工学に活用されたことは数学の「有用性」の好例だが、それを強調しすぎるのも害がある。思うに、数学は役に立つから重要なのではなく、「言語」と並んで人間の思考活動の根幹をなすものだから重要なのである。言語学者チョムスキーの仮説によれば、人間の言語獲得能力は遺伝子に組み込まれた生得のもので、特に第一言語はすべての人間に共通の原型から出発して幼児期の間日本語・英語など

個々の言語体系に特化するという（かつては荒唐無稽と言われたこの仮説にも、近年実験的証拠が得られているそうである）。数学も、「数を数える」とか「筋道を立てて考える」というような基礎の部分を見れば、すべての人間に共通の遺伝的基盤があり、それがかなり早い時期に発達して固まるように思われる。だからこそ数の計算は小学校で身につけておく必要があり、文字式の計算や2次方程式の解法は（一見それが家事にも物書きにも役に立たないように思えても）中学校で学ぶ価値があり、高校では論理的訓練にも励んでほしいのである。人間が困った時に最後に頼れるのは（また頼るべきなのは）金銭でもコンピュータでもミサイルでも宗教でも占いでなく、このような基盤的能力であろう。

最後に、ガロアの生涯と数学についてさらに知りたい読者のために彌永昌吉『ガロアの時代ガロアの数学』（シュブリンガー・フェアラク東京、第一部1999年、第二部2002年）を紹介しておこう。ガロアについて上で述べたことはほとんどこの本からの受け売りである。この本の筆者は長年にわたって学术交流に尽力された数学者で、1906年生まれの高齢（とうに90歳を越えている）にもかかわらずこの力作を上梓された。ちなみに、一昨年、知人から「テロと報復戦争に反対する数学者の声明」を出すので賛同者に加わってほしいとの電子メールが届いたが、呼びかけ人一覧の中にこの筆者の名前があった。私が賛同者に加わったのは言うまでもない。

（情報科学論講座 たかさき かねひさ）

火山国・地震国の危機管理



新しいミレニアムの2000年を迎えてから、日本列島は、有珠山・三宅島と立て続けに大きな噴火を経験した。その後、富士山の地下では低周波地震が起き、浅間山でも火山性の地震が観測された。日本列島の火山が活動期に入ったと考える研

究者も、少なからずいる。

火山の噴火だけではない。1995年の阪神・淡路大震災の後、西日本では比較的大きな地震が続けて起きた。過去に発生した地震の痕跡である活断層の調査が進み、自分の住む家の近くにも、思わぬ活断層が伏在することに驚いた人も多い。しかし、1995年以前には、「関西には大地震が起きない」という根強い迷信があり、地震学者たちをいらだたせていた。

無論、世紀末が近づいて危機を迎えたわけでは決してない。1500万年の太古、日本列島はアジア大陸から分離して島国となった。その後、100万年ほど前からは、世界有数の変動帯として活動を続けている。だから今でも日本は、火山国であり地震国なのである。ただし、その変動には波がある。立て続けに噴火や地震が続くような時期もあれば、比較的静穏な期間もある。これらは、地質学の扱う時間スケールで見れば、ごく当たり前の自然の摂理である。ムラがあるのが自然現象だと思っただ方が、正しいだろう。気まぐれだから、かえって自然らしいのだとも言える。

その自然が気まぐれに動いた時、人間の側では、思いもかけない災害が発生したと受け取る。これを天災と言う。どんな天災でも、不意打ちにあうと危機が生ずる。しかし、起きることを予測していれば、なんとかやり過ごすことができる天災も少なくない。台風が来る前に、しっかりと家の準備をするようなものである。これとは逆に、阪

神・淡路大震災のように、文字どおり寝耳に水の場合、巨大な災害が発生する。

天災は頻繁に来れば、人々はそのために準備を怠らない。たとえ間があいても、定期的にやってくるのが分かっているならば、対処できる。エジプトの人々が、ナイル川の洪水に対して備えたようなものである。しかし、あまりにも間があいたり、もしくは不定期に襲ってくる場合、準備のしようがないか、あるいはその意欲を甚だしくそがれる結果となる。

地球物理学者の寺田寅彦は、「天災は忘れた頃にやってくる」という趣旨の言葉を残した。自然災害の記憶を長いあいだ留めておく難しさを、見事に言い当てた名言である。特に、火山の場合は、噴火と噴火の間隔が、数百年に及ぶことも珍しくない。例えば、わが国の代表的な活火山である御岳山は1979年に噴火したが、8000年ぶりのことであつた。火山災害に関して言えば「天災はすっかり忘れ去られてから、さらに長い時間がたった頃にやってくる」のである。次の噴火に備えて8000年も準備し続けるのは、現実離れしている。災害の再来間隔が長いほど、危機管理は難しくなる。

1707年、富士山は大爆発を起こした。有名な宝永噴火である。江戸の街では、何日も火山灰が降り積もった。新井白石は、「雪のように降りしきる火山灰のため、薄暗くなってしまう、昼間からあかりをつけて講義をした」と、『折りたく柴の記』に書き残している。

昨年6月、もし富士山が宝永クラスの噴火をすれば、首都圏を中心として2兆5000億円に達する被害が発生する試算が、内閣府から公表された。富士山は歴史時代に三回噴火しており、大きな被害を出してきた。もし山頂付近から噴火した場合には、火山灰が出ても溶岩流が出ても、広範囲に影響を及ぼす可能性がある。日本一の標高をもつ富士山は、予想される災害も最大級なのである。

噴火災害を最小限に食い止めるためには、どの範囲にいかなる危険が及ぶかを示すハザードマッ

プ（火山災害予測図）が、威力を発揮する。先の有珠山の噴火では、前もって住民に配られていたため、避難が速やかに完了し、一人の死者も出さずに済んだ。これまで、富士山のハザードマップはなかったが、2003年春を目標に、現在精力的に作られている。ここでは多くの火山学者が、危機管理に参画している。

富士山は300年間も不気味に静けさを保っているが、地下のマグマは活動を止めてしまったわけではない。2000年秋、マグマの活動を示唆する低周波地震が観測されてから、活火山としての富士山に対する関心が、急速に高まった。最近の研究では、富士山は、比較のおだやかな溶岩の流出だけでなく、高温・高速で極めて危険な火砕流も噴出したことが分かってきた。このような知識は、避難区域の設定などの具体的な危機管理のために、非常に貴重な情報となる。

火山噴火というのは、研究者以外ほとんどの人が見たことのない現象である。人は経験のないことに直面した時に、パニックを起こしやすい。無責任な風評が飛びかい、混乱に拍車をかけることもある。例えば、1991年に雲仙普賢岳で初めて“火砕流”に遭遇した人の何人かは、恐怖感に襲われてパニックに陥った。そうならないためには、前もって起きそうなことを熟知しておくことが肝要である。

火山学の教育は、噴火時の危機管理に貢献する。火砕流など実物に触れることが不可能な現象に対しても、映像などで実体を見ながら疑似体験することは有効である。地震防災においても、震度6の揺れを経験できる起震車が各地を巡回し、実体験してもらう試みが行われている。2001年7月、雲仙普賢岳の麓にある島原市に開館した火山博物館では、火砕流の中をくぐり抜けるビジュアル体験コーナーが設けられている。

私は、＜危機＞の時代に対処する学問を、あらためて用意する必要があるとは思わない。既に蓄積された学問の中には、時代のもたらず危機に対

して、的確に対応できるものが存在する。問題は、社会に向けて学問を還元する意欲とサービス精神を持っているかどうか、である。

最近、優れた研究成果を社会へ還元することが、大学の本務の一つと見なされるようになってきた。良いことであると思う。私自身も昨年、火山に関する新書版の啓発書を出してみ、一般社会から火山学に対する要請が思ったよりも大きいことを認識した。自分でやってみると、啓発運動が片手間でできることでは決してないことも、よく分かった。複雑な火山現象と災害対策の本質を押さえて、情報を分かりやすく的確に伝えることは、それだけで学問として十分に成立する。

自然災害の多い日本では、市民全体の科学のリテラシーを上げておくことが重要である。一見迂遠なようでいて、いざという時の危機管理に直結する。総合人間学部及び人間・環境学研究科の教育・研究組織は、学問の社会還元という側面において、最も力を発揮する部局であると思う。社会が危機管理のために必要とする情報を、自分の研究分野から発信することが、＜危機＞の時代に求められている学問である、と私は考える。



富士山の宝永火口。撮影：東京新聞・堀内洋助氏。

（生物・地球圏環境論講座 かまた ひろき）

退官される先生方からのメッセージ

定年退官に思うこと

人間学科 有福 孝岳



思えば、前任地名古屋大学文学部より、総合人間学部の前身たる教養部に赴任したのが、昭和52（1977）年10月であった。

京大に赴任して以来、思い出になる仕事の一つとしては、竹市明弘先生を会長として、「現代哲

学研究会」を起こし、後には自らも会長として同会を運営してきたことである。同研究会の手始めの仕事として、竹市先生が、当時ドイツの卓越した現役の哲学者達の書物や論考をピックアップして、これらを若手の研究者に翻訳させて、完成させた全十二巻の根本問題シリーズは、当時の日本の哲学界に強烈なインパクトを与えた。この「現代哲学研究会」は、一年に数回、日本国内のみならず、海外の優秀な学者をも招待して講演会やシンポジウムや研究発表の機会を設けた。こうして現代哲学研究会が京都の地で起こした哲学運動の一端を担いえたことを今なつかしく思い出す。

私自身も、この根本問題シリーズの一冊として『倫理学の根本問題』を責任編集することとなり、そのなかで当時のミュンスター大学教授のカウルバッハ先生の『倫理学とメタ倫理学』を翻訳した。若年よりカント研究を志していた私にとって、ドイツにおける有数のカント学者、カウルバッハ先生の著書を日本語に訳したことは、その後の研究活動に大いに益するところとなった。すなわち、翻訳を通じてカウルバッハ先生と書面の上で知り合いになり、その後フンボルト財団の研究奨学生としてミュンスター大学の同先生のもとに1980～82年まで留学することができた。

毎週カウルバッハ先生の自宅においてカントの『純粋理性批判』の読書会を持っていただいただけではなくて、当時のユーゴスラヴィア（現モンテネグロ）のドゥブロブニクという地中海沿岸の

町で毎年春に催されていた国際大学センターでのニーチェゼミナールに連れて行って貰い、ドイツやユーゴスラヴィアの大学院生・研究者・学者の前で「超人と仏陀」というテーマで講義した。その後、このセミナーに2・3度参加して、ドイツのみならず、世界各国の学者たちと知り合いになることができた。この会合で知り合ったギュンター・ヴォールファルト教授によって、後にヴッパータール大学の客員教授として招待され、禅仏教についての講義・演習・プロゼミを1991年の夏学期に担当することになった。一週間に三つの授業をドイツ語で行うことは、私にとってはかなりハードな仕事であったが、これを契機にしてドイツ語作文があまり苦にはならなくなったように思える。

京都大学に赴任して以来、これまで諸方面・諸領域において研究・学会・著作活動を展開することが出来たのも、あるいはテキストを厳密に読む力がついたのも、留学生活や国際学会での研究発表や各国の学者との学問的対話などが非常に役立っていると自分では確信している。そうした体験が、カントの『純粋理性批判』の翻訳にも甚だしく有効であったことは言うまでもない。

京都大学教官として25年間、教養部、総合人間学部、大学院人間・環境学研究科、文学部・文学研究科などで講義、演習、ゼミなどを担当してきて、つねに優秀な学生と一緒に勉強し自らを錬磨することができたのは教師冥利に尽きると思う。これからは、教師であることはできても、今までのようにカントの演習ができないであろうということを考えると、非常に寂しい思いである。京都大学の諸先生、事務官の方々、長い間お世話になり、本当に有り難うございました。どうか皆様もお元気でお過ごしください。

（人間基礎論講座 ありふく こうがく）

出逢い



この秋のこと、学会の
合い間を縫って出雲崎に
きていた。まだ夜も明け
やらぬ薄明のなかを、新
潟「白山」駅からJR越
後線の鈍行列車に身をま
かせた。良寛ゆかりの地
を訪ねるためだった。バ
スを降りて良寛記念館の

前に立った。ここは、北国街道に臨む出雲崎の集
落を眼下に見おろす丘の上で、もと良寛の先祖
代々(橋屋)の墓地跡である。がらんとした清楚な
館内には手紙、短冊、掛け軸、屏風など良寛の書
が相当数展示してあった。そのなかには般若心経、
弟の由之を諭す手紙、円通寺での修行時代を追憶
する漢詩、有名な地震見舞状、維経尼へ書き送っ
た漢詩などがあった。

君は蔵経を求めんと欲し
遠く故園の地を離る
呼嗟吾何をか道わん
天寒し自愛せよ

大蔵経購入の一助にと、はるか江戸の冬空のも
とで勸進にはげむ尼僧。このわずか二十字足らず
の言葉には彼女への万感の情愛がこめられている。
書の見方については私は無知に等しい。ただ
言えるのは、これらの書を心ゆくまで眺め、部屋
を去ってからもこれほど清らかな想いがいつまで
も消えなかったことはない。どの書にも上手下手
を越えた清らかな気品のようなものが漂ってい
た。記念館の横の坂道を登りつめると「虎岸の丘」
で、そこには佐渡を歌う歌碑が島に向かって建っ
ていた。ここからは、右手の海岸線の先に良寛晩
年の五合庵のある国上山も見えるはずであった。
しかし降りしきる雨のなか、海とも空ともつか
ない鈍色の前景が縹渺と漂っているばかりであっ

国際文化学科 稲田伊久穂

た。やがて北国街道に降りて、良寛堂に出た。整
地された旧橋屋の屋敷跡には、二間四方の簡素な
お堂が建ち、まばらな松陰には良寛の歌碑が刻ま
れていた。

古えに変わらぬものは荒磯海と

向かいに見ゆる佐渡の島なり

十八年ぶりの故郷はすべて一変していた。す
でに父母は亡く、没落した生家は荒れはてていた。
彼は深笠に顔をおおい、故郷を通り過ぎていった
という。すでに家を出たときに、心ひそかに別離
を告げていたのである。帰りのバス停に立ってい
ると雨も小降りとなり、海の彼方に島影らしきも
のがけぶるように浮かんできた。そして一瞬その
全貌を見せたかのように思えた。

帰路、列車のかたい背凭れにゆられていると、
かつて大学でした妙な体験を思い出した。教養
も終りに近い頃であった。教科課程委員会の委員
長に祭り上げられ、ときに学部封鎖があると、樂
友会館で妙案のない論議を重ねることもあった。
そうしたなかで、ちょうど前期定期試験の開始日
に台風が直撃しそうになった。不測の事態に備え、
A号館の研究室に泊まりこんだ。晩から吹き始め
た風は夜半にはいっそう激しさを増し、露台の鉄
扉があちこちで激しく打ちつけられる音と、風に
翻弄される樹木のざわめきとで、ほとんど眠れな
かった。朝方には風もなぎ、明るみ始めた窓から
中庭を眺めると、無惨に散った木の葉や枝のなか
に青々としたいぶぎらしき木が三本倒れていた。
その光景を目にしたとたん、私はそれらの庭木に
血縁に近いような深い親近感を覚えた。ほとんど
本能的なものであった。そのとき以来大学には、
わが家のような親密さと気安さを感じるようにな
った。

人はそれぞれ、このような思い出を胸にしまっ
て立ち去ってゆくのかもしれない。

(言語文化論講座 いなだ いくほ)

十年一日

基礎科学科 宮本 宗實



今年、総合人間学部の微分積分学の講義を担当しました。これは毎年どこかの学部でしている慣れた講義です。本論に入って最初に数列の単調収束定理を説明します。数列 $a_n = (1 + \frac{1}{n})^n$ が単調増加であることを示し、この

定理を使って、数列 a_n は n のとき収束すると結論します。この極限が自然対数の底で e と書きます。

この e が無理数であることを、私の講義では「解析概論」に従って証明してきました。この証明には Taylor の公式を使いますが、講義でこの公式が出てくるのはずっと後のことで、それまでお預けです。しかし、数列 a_n の単調性の証明はかなり手間がかかりますから、極限の存在だけでなく無理数であることの証明も同時にできれば達成感がいっそう実感できます。高校で厳密な証明なしに話だけに聞いていた e の定義とそれが無理数であることの証明を、できれば、新入生の4月の講義で一気にしたいところです。

また、この証明では $e = \frac{m}{n}$ と仮定するのですが、Taylor の公式の剰余項として第 n 項ではなく、もっと小さな第 $(n+1)$ 項をとります。これは如何にも技巧的です。

前夜、夜中に目が覚めて翌日の講義のことをぼんやりと考えていて、剰余項はもっと小さくできることに気がつきました。早速起きて次のようにまとめました。なお、数列 a_n の単調性の証明の副産物として、 e について次のことはすでに証明してあります。

$$(*) \quad e = \frac{1}{0!} + \frac{1}{1!} + \frac{1}{2!} + \cdots + \frac{1}{n!} + \cdots$$

$$(**) \quad 2 < e < 3$$

$$e = \frac{m}{n} \text{ と仮定する。} (*) \text{ より}$$

$$\frac{m}{n} = \frac{1}{0!} + \frac{1}{1!} + \frac{1}{2!} + \cdots + \frac{1}{(n-1)!} + \frac{1}{n!} + \cdots$$

$$= \frac{1}{0!} + \frac{1}{1!} + \frac{1}{2!} + \cdots + \frac{1}{(n-1)!} + \frac{c}{n!}$$

ただし、 $c = 1 + \frac{1}{n+1} + \frac{1}{(n+1)(n+2)} + \cdots$ 。両辺に $n!$ を掛けると、

$$m(n-1)! = \frac{n!}{0!} + \frac{n!}{1!} + \frac{n!}{2!} + \cdots + \frac{n!}{(n-1)!} + c$$

右辺の c 以外はすべて整数だから、 c も整数。ところが、 c の定義と $(*)$ を比べると、 $1 < c \leq e - 1 < 2$ 。このような整数はない！

この証明では上に挙げた問題点は解消していません。「解析概論」は多くの人に長く読まれてきた教科書ですから、この証明もすでに誰かが気がついていると思います。しかし、そのときの私にとっては嬉しい発見で、翌日の講義は爽快な気分で行きました。

微分積分学の内容は安定していますから、十年一日のごとき講義を毎年しています。それだけだと、数学の面白さは伝わりません。面白さを伝えるには、自分自身が楽しむことが必要です。さいわいなことに、ここに書いたような小さな発見がときどきあって自分でも楽しんで講義ができました。自分でも面白いと思って話すとき、目を輝かせて聞いてくれる学生がいます。教師として非常に幸福でした。

(数理基礎論講座 みやもと むねみ)

新任教官紹介

新任のご挨拶



10月1日付けで総合人間学部基礎科学科数理基礎論講座に助教授として転任してまいりました足助太郎(あすけ たろう)と申します。至らぬ点が多々あるかと存じますが、よろしく願い申し上げます。以前は広島大学理学研究科数学専攻で助手をしておりました。その時は数学科の学生を相手に演習や学生セミナーなどを担当しましたが、こちらでは教養の講義をいくつか担当しています。必ずしも数学を専門としない学生であっても、基礎的な部分においては数学科の学生と同程度の知識が必要になることも多いと聞きますし、私個人としてもせっかくお互いに時間を割くのですからいろいろなことを吸収し、欲しいと思いつつながら講義を進めています。

ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、足助というのは愛知県にある地名です。先祖はどうやらそこに住んでいて、それで足助を名乗ったようなのですが、現在は当地には足助姓の人はほとんど住んでおりません。以前家族で旅行に行ったときなどは旅館に「足助御一行様」と玄関にわざわざ書かれたりもして、やはり今となっては珍しいようです。ちなみに足助には香嵐溪という紅葉の名所がありますので、機会があればぜひ一度いらしてみてください。

学問的な話をしますと、私の専門は数学です。もう少し詳しく言えば幾何学、更に詳しく言えば微分位相幾何学です。実は微分位相幾何学といっても研究対象としてはまだ大雑把で、色々な研究があるのですが、私は特に葉層構造論・力学系及びその関連分野を研究しています。研究対象の例としては「ボールの表面(球面)」が挙げられ

基礎科学科 足助 太郎

ます。球面に適当に直線や曲線で、それぞれの線が重ならないように縞模様を描いていこうとします。全部を経線のようにしようと思うと北極と南極で線が重なってしまいます。また、全部を緯線のようにしようと思うと今度は北極と南極では線を引きようがなくなってしまいます。実はどんなに頑張ってもこのような具合になってしまっとうまくいかないということが数学的に証明できるのですが、その際に葉層構造や力学系といった考え方が現れます。今の場合にはボールを実際に用意するなり、図を描くなりすれば目の前に物があるのでそれを見て状況を理解することが出来ますが、たとえば話を飛躍させて「宇宙空間全体」に模様で表される何かを考えようとする場合、そういうわけには行きません。また、図は事象全ての情報を含んでいますが、逆に言えば情報が多すぎて却って何も分からなくなる、ということもあります。そこで適当に情報を間引き、「宇宙空間全体」のように話が大きくなってしまっても何とか理解が出来るような数学的な量(たとえば数)を取り出してきて大雑把に状況を理解することが大事になってきます。実は上に述べたことも、オイラー数と呼ばれる量を用いると説明ができます。現在私が取り組んでいるのは、葉層構造や力学系からオイラー数のような量を取り出してそれを解析するという事です。このような研究は古くて新しく、形を変えて常に存在してきましたし、今後なくなることはないと思われます。微力ながら何らかの形で貢献できればと思っています。

さまざまな機会にいろいろな形でお世話になると思います。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

(数理基礎論講座 あすけ たろう)

研究・教育活動紹介

哲学的立場と歴史理解

人間学科 富田 恭彦



もう十年以上も前のことだが、拙著『ロック哲学の隠された論理』の「まえがき」に、私は次のように書いた。「かつて、歴史記述は現代史にほかならないと言われたことがあるが、それと同じように、テキスト解釈もまた、「過去」のテク

ストを解釈するという形を借りて、それを行う人間の「現在」を語ることにほかならない。したがって、本書の試みの成否は、同時に、解釈者たる私の現在の哲学的立場の成否でもある。」これらの言葉は、現在でも変わらない歴史理解に対する私の基本的スタンスを、明確に表明している。今自分が何を正しいと思っているかが、過去の思想を理解する際に、ある種の必然的影響を与える、というわけである。

このことは、一見奇異に見えるかもしれない。しかし、20世紀の言語哲学や科学哲学のある潮流は、この事態が否応なしに受け入れざるをえないものであることを示した。ところが、これを受け入れると、それは、ある種の直観 すなわち、過去の思想の内容は、われわれの考えとは関係なく定まっているはずだという直観 と、軋轢を生じることになる。そして、その結果、それは、絶対的真理を認めない、自己反駁的でふまじめな立場として、しばしば冷笑されることになる。

思想はそれ自体としての定まった内容を持っているという直観と、それを解釈する際の解釈者自身の信念（信じていること）の必然的関与という事実とをどう折り合わせるか。現代哲学のこの重要課題に関して、いくつかの異なる立場が対立し合っている。その中で、歴史認識に限らず、あらゆる認識において、認識者の現時点での信念がそれに関与することを認めながら、真理を相対的なものとする見方（相対主義）を拒否するというの

が、二十年來の私の哲学的立場である。

さて、「それ自体としてあるもの」をあるがままに受け入れることとして認識を捉える視点からすれば、粒子仮説の立場から認識を考察しようとした17世紀のロックの科学哲学などは、科学を用いて科学を考察しようとする悪しき「循環」にしか見えない。ところが、上述の私の視点からすると、ロックの立場は、かなり違ったものに見えてくる。自分が今正しいと思っている科学理論を用いて科学について考察するのは、至極当然のこととなるのである。こうした視点から、西洋17世紀の科学哲学、特に、デカルトとロックのそれを読み直すことが、ここ数十年の私の仕事の核心部分をなしている。

嬉しいことに、そうした私の仕事に対して、とりわけ海外から、様々な好意的対応が寄せられてきた。1995年には、冒頭に言及した著書の改訂英語版がオランダで出版され、翌年には、イギリスの学会誌・専門誌に、その書評が相次いで掲載された。そして、それが機縁となって、私の西洋17世紀研究を一つにまとめた論文集が、ドイツで、2001年に、出版されることとなった。

私の研究は、専ら、海外の研究者に支えられている。オックスフォード大学出版局のロック著作集編集主幹を務めたジョン・ヨルトン教授、かつてハーバード大学でお世話になったクワイン教授をはじめ、多くの人々から、この間、多大の励ましをいただいた。研究はさらに進んで、ここ数年は、18世紀のジョージ・パークリの思想の全面的読み直しを行っている。

最近、イギリスの専門誌に、パークリ再考論文の一つ目が掲載された。その背景には、国際パークリ協会会長 I. C. ティプトン教授の強力な支持があったと聞いている。調子に乗って、いつかカントまでと夢想している今日此頃である。

（人間基礎論講座 とみだ やすひこ）

私にとっての3つの物理学

基礎科学科 青山 秀明



私の専門は、理論物理学・素粒子論である。しかし、様々な専門の人と出会い、興味ある話題を聞き、ディスカッションを重ねるにつれて、純粋な理論物理以外の分野にも首を突っ込み、論文を書くようになった。そのようにして、私はここ数年、3種類の研究を平行して進めるようになった。

それらはいずれも、対象こそ様々であるが、私にとっては、間違いなく物理学である。ここでは、それらについて簡単に紹介しておきたいと思う。

総合人間学部はいま、変革の時を迎えているが、ここで、このような風変わりな研究をしていた物理屋が居たことが、誰かの記憶に残ればよしとしよう。

i) 素粒子論：素粒子は場の理論を用いて記述される。私は何人かの共同研究者達と、この場の理論での「非摂動的効果」と呼ばれる問題を扱うための「バレー法」という解析法を開発してきた。この研究は思わぬ副産物を生み出した¹⁾。その副産物とは、「N重超対称性」と呼ばれる新しい形の超対称性である。

自然界には、大別して2種類の素粒子が存在する。それらは、物質を構成する陽子、中性子、電子などのフェルミ粒子と、それらの間の「力」を媒介する光子、中間子などのボーズ粒子である。これらを相互に関係付けるのが超対称性であり、究極理論には超対称性が存在すると考えられている。この超対称性の本質は量子力学モデルでも見ることができ、我々はその一般化を発見し、「N重超対称性」と名付けたわけである。

物理学では、対称性が多くの場面で本質的な役割をする。したがって、新しい対称性を発見できたことは、いわば素粒子屋冥利に尽きると思っている。しばらくはこの理論の発展に尽くすことになるだろう。

ii) 経済物理学：最近急速に発展してきて、着目を浴びている分野の一つに「経済物理学」がある。これは従来の経済学や金融工学とは異なった、物理の目で経済現象を研究しようというものだ。経済現象は、多くの個人や企業などの「エージェント」の複雑な振舞いが寄り集まった結果として生み出されるものだが、そのような状況は、物理学が最も得意とする分野である。そのため、近年では多くの物理学者が経済・社会現象の研究に従事している。

我々は個人や企業の所得の研究を行い、そこで、所得の分布とその変動について、ある現象論的法則を発見し、“universality”と名付けた。これは従来全く知られていなかった法則であり、物理的手法の成功例だと自負している。我々はさらに、それらの法則を満たす確率過程モデルを提唱した。これにより、各エージェントの行動法則が明確となり、企業の複雑系としての発展理論や、金融市場も含めた総合理論への道が開かれたと思っ

ている²⁾。
iii) 言語物理学：とは、聞かない名前だろう。そのはずである、「経済物理学」に倣って私が発明した用語なのだから。これは本学部で英文学の助教授であった John Constable 氏との共同研究である³⁾。この研究では、200万を越える単語からなる文章データを用い、英語の音節構造の高精度の統計的研究を行った。その結果、散文について我々が“random segmentation rule”と名づけた法則を発見した。さらにこの法則を使って、韻文についても実証的研究を行った。これの研究から、言語の発展や、発話のコミュニケーションとしての効率性について多くの示唆が得られており、現在もさらに研究は進みつつある。

どれもまだ語り尽さないが、与えられた紙面も尽きたので、ここで筆を置くことにする。

(自然構造基礎論講座 あおやま ひであき)

1) それが見出されるまでの紆余曲折の経緯については、雑誌「数理科学」2002年5月号に書いた。

2) 解説は雑誌「数理科学」2002年10月号の私他2名の記事にある。

3) 本ページの写真はCambridgeの彼のオフィスで昨年撮ったものである。

学部掲示板

教授会報告

平成14年6月20日(木)

議事

1. 教官の選考について
共通教育企画室外国語教育研究部門助教授に中森誉之を選考決定した。
2. 教官の選考報告について
基礎科学科数理基礎論講座空間現象論分野助教授候補者について、選考委員から選考報告があった。
3. 平成14年度非常勤講師等について
非常勤講師1名、授業担当者1名を承認した。
4. 平成13年度校費等の決算について
原案どおり承認した。
5. 奨学寄附金の受入れについて
5件の受入れを承認した。
6. 特別聴講学生(京都大学国際教育プログラム履修者・私費外国人留学生)の受入れについて
7名の受入れを承認した。
7. 科目等履修生の除籍について
1名の除籍を承認した。
8. その他、報告
 - (1) 教官の海外渡航について(3か月以内)
 - (2) 平成14年度4回生の指導教官について
 - (3) 学生の異動について
 - (4) 将来構想について
学部長から、人間・環境学研究科の改組について、改組の概算要求を行なうことになった等の説明があった。
 - (5) 進路指導に関する指針について
進路指導委員会委員長から、進路指導に関する指針についての説明があった。

委員会等報告

- (1) 学術情報メディアセンタ - 学内共同利用運営委員会委員から、9月を目安にKUINSへ移行願いたい。利用負担金について、今年度の課金は全学経費でまかなうよう要望中である。また、KUINSの利用料は1IPアドレス当り1500円になる等の報告があった。
- (2) 同和・人権問題委員会委員長から、この間の差別落書きについて報告があった。
- (3) 全学共通科目委員会委員長から、セメスタ - 制実施後初の定期試験に関し、種々の要請があった。
- (4) 学部長から、最近発生した恐喝事件について注意喚起ビラを出した。サッカーの授業中に事故が発生し、今後のスポ - ツ実習中の事故に対応するマニュアルが作成されたとの報告があった。

平成14年7月18日(木)

議事

1. 教官の選考について
基礎科学科数理基礎論講座空間現象論分野助教授に広島大学大学院理学研究科助手足助太郎を選考決定した。
2. 平成14年度非常勤講師等について

- 非常勤講師1名、授業担当者1名を承認した。
3. 平成14年度校費予算配分案について
校費予算配分(案)等について説明があり、原案どおり承認した。
 4. 平成14年度職員旅費予算配分案について
原案どおり承認した。
 5. 奨学寄附金の受入れについて
2件の受入れを承認した。
 6. 平成14年度授業料を不徴収とする大学間学生交流協定に基づく派遣留学生について
4名の派遣を承認した。
 7. 研究生の除籍について
1名の除籍を承認した。
 8. 統合準備委員会の設置について
総合人間学部と人間・環境学研究科の統合に伴う重要事項を検討するために統合準備委員会の設置と委員構成について提案があり、承認した。
 9. その他、報告
 - (1) 教官の海外渡航について(3か月以内)
 - (2) 将来構想について
学部長から、総合人間学部並びに人間・環境学研究科の再編整備(改組)が6月25日の評議会で承認されたとの説明があった。
 - (3) 学生の異動について
 - (4) オ・ブンキャンパスについて
入試委員会委員長から、オ・ブンキャンパス実施計画の説明等があった。
 - (5) 転学部(転入)の取り扱いについて
入試委員会委員長から、転学部(転入)の取り扱いについて説明があり、了承した。
 - (6) 7月30日のクリン作戦について
 - (7) 中期目標・中期計画について
学部長から、7月5日に説明会を実施した。人環・総人で作業委員会を設置し、原案を7月23日に作成し全教官に配布予定であると報告等があり、引き続き作業委員会世話人から7月末提出の計画書素案の概略と今後1年間の議論を重ねて成案としていく等の説明があった。

委員会等報告

- (1) 全学共通科目委員会委員長から、前期定期試験の終了後に改善点等を検討したい。教育改善推進費・教育基盤整備費について具体的希望があれば書面で申し出てほしいとの報告があった。
- (2) 全学共通科目在り方WG委員から、WGでの議論は専らA群科目の質的・量的問題についてであること。11月初旬に合宿形式で、A群科目の在りようについてのセミナー開催を予定している等の報告があった。
- (3) 企画小委員会委員から、委員会では現在A群科目問題が議論の中心になっている。6月26日の委員会で委員長私案が承認され、上部委員会に提出されたとの報告があった。
引き続き、学部長から企画調整専門委員会で、上記文書の説明があったとの報告があった。
- (4) 調整(評価)小委員会委員から、8月30日、31日に開催の全学シンポジウムの日程及び全学アンケートについて説明等があった。
- (5) 学部長から、京大民受連から要望書の提出があったとの報告があり、引き続き全学同和・人権問題委員会委員から平成10年に民受連から申し出があり、様々な検討を行い、平成12年末に中間報告を出し、この9月に最終答申を取りまとめる予定であるとの説明があった。
- (6) 学部長から、A号館北棟の取壊しが8月5日から始まるのに伴い、教室の変更、次年度第1・第5時限の授業開講に協力を願いたいとの要請があった。

平成14年9月19日（木）**議事**

1. 招へい外国人学者等の受入れについて
2名の受入れを承認した。
2. 平成15年度文部科学省在外研究員候補者の推薦について
長期（甲種）1名の推薦を承認した。
3. 平成14年度非常勤講師等について
非常勤講師2名、授業担当者1名を承認した。
4. 研修員の受入れについて
1名の受入れを承認した。
5. 奨学寄附金の受入れについて
1件の受入れを承認した。
6. 民間等との共同研究の受入れについて
1件の受入れを承認した。
7. 受託研究の受入れについて
1件の受入れを承認した。
8. 受託研究契約の変更（経費）について
1件の変更を承認した。
9. 平成14年度卒業者（9月卒業）の決定について
1名の卒業を承認した。
10. 平成14年度聴講生の入学（延長）許可について
1名の延長を承認した。
11. 平成14年度科目等履修生の入学（延長）許可について
1名の延長を承認した。
12. その他、報告
 - (1) 教官の海外渡航について（3か月以内）
 - (2) 将来構想について
学部長から、9月9日に改組の説明会を行なった。その後 学部の改組は特に問題なく進んでいる。 人間・環境学研究科の改組は、10月中に補正審査書類を作成することになった等の説明があった。
 - (3) 学長裁量経費について
議長から、要求事項の報告があった。
 - (4) 学生の異動について
 - (5) 特別聴講学生（京都大学国際教育プログラム履修者、私費外国人留学生）の辞退について
 - (6) 差別落書きについて
学部長から、9月3日発見の落書きについて説明があった。
 - (7) パソコン等の盗難について
学部長から、最近盗難が相次ぎ、A号館でも2研究室でパソコン等の盗難があったので、各部屋の施錠等について注意喚起があった。

委員会等報告

- (1) 全学共通科目委員会委員長から、前期定期試験は無事終了した。後期期末試験の教室について、改築等により9室の不足が考えられる。10月1日から多数の教官に教室変更をお願いしている等の報告があった。
- (2) 事務長から、10月10日の京都大学会計実地監査について説明があった。
- (3) 構成員から、改組について9月9日の説明会があり、又統合準備委員会は設置されているが、今後も種々の意見交換を行なう場が必要であるとの申し出があり、学部長からそのような場を設定したいとの回答があった。

平成14年10月24日（木）**議事**

- 1．招へい外国人学者の受入れについて
2名の受入れを承認した。
- 2．平成14年度非常勤講師について
非常勤講師1名を承認した。
- 3．奨学寄附金の受入れについて
1件の受入れを承認した。
- 4．平成14年度校費（一般教育学生経費）予算配分について
一般教育学生経費の予算配分について提案があり、提案どおり承認した。
学部長から、本年度の総長裁量経費について、「全学共通科目履修予備登録のシステム改善」、「講義室等教育環境整備」、「LL教室教育環境整備」の計3件が採択されたとの報告があった。
- 5．その他、報告
 - (1) 教官の海外渡航について（3か月以内）
 - (2) 将来構想について
学部長から、現在人間・環境学研究科の改組について11月設置審への補正審査書類を作成中であるとの説明があった。
 - (3) 平成14年度教授会等（後期）予定表について
 - (4) 学生の異動について
 - (5) 差別落書き等について
同和・人権問題委員長から、10月5日に発見された差別落書きについて、全学同和・人権問題委員会が行なった民族学校出身者への学部入試の受験資格に関する答申について報告があった。
 - (6) 平成14年度「21世紀COEプログラム」採択状況について

会議等報告

- (1) 統合準備委員会世話人から、10月11日の委員会では、専攻・講座事務の運営検討WGの経過報告、学部長・研究科長を1月に選出するための準備等について、緊急を要する検討課題について討議を行なったとの報告があった。
- (2) 学術情報メディアセンタ - 学内共同利用運営委員会委員から、KUINS の課金方法等について説明があり、学部としては教職員数による課金方式を態度表明することを了承した。
- (3) 進路指導委員会委員長から、進路指導指針に基づく委員会の対応について報告があった。
- (4) 全学共通科目委員会委員長から、後期試験にかかる調査票について、平成15年度時間割振表の、A群自由選択科目の対応について、また教室事情について説明があった。
- (5) 人間・環境学フォーラム実行委員会委員から、12月6日開催の人環フォーラムのポスタ・セッションに教官の参加要請があった。

以 上

平成14年度 総合人間学部、大学院人間・環境学研究科公開講座 「人間環境としての場——人間と地球を結ぶもの——」

世話人 西井 正弘

平成7年（1995年）度から毎年開講されるようになった総合人間学部の公開講座は、平成10年度から大学院人間・環境学研究科の公開講座を併せて、共催の形式で毎年1回9月に開催されるようになった。平成14年（2002年）度は延べ10回目の開催となり、9月17日、18日の2日間にわたり、本学大学院人間・環境学研究科棟地階大講義室で別記の内容で開催された。この公開講座の目的は、現代の諸問題を既存の学問分野の枠を越えて、様々な角度から総合的に論じようとするものである。

本年度のテーマとしては、「人間環境としての場 人間と地球を結ぶもの」を掲げた。我々、生きている人間をとりまく環境の中において、「場」のもつ重要性を、幅広い観点から考えてみたいというのが、今回の講座の趣旨である。

このような企画のもとに、6名の講演者にご参加いただき、世話人と共に3度にわたって、講座の趣旨と目的に沿った講演題目を確定していった。毎回の打ち合わせ会で、講演者には講演テーマを紹介いただき、他の講演者との繋がりなどを考慮して、講演内容を修正していただいた。その結果、公開講座としては、一貫したテーマに沿ったものとなったように思われる。

第1日目は、教育の場、労働の場、インターネット空間という場における、それぞれの「場」のもつ重要性について講演が行われた。

西垣安比古助教授は、16世紀朝鮮において、私学としての書院が設立されるが、その中心となった李退溪を取り上げ、人間の生と結びつき、周囲の山水をも含めた建築的場所のもつ重要性を、映像を示しながら論じられた。

小畑史子助教授は、労働の場が、第2次産業が

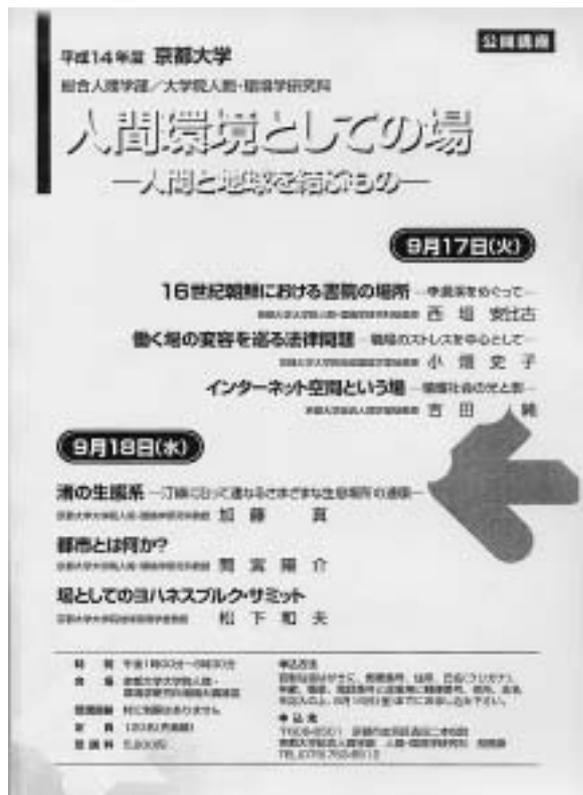
ら第3次産業への構造変革に伴い、工場からオフィスへと変わり、裁量労働制の採用により労働時間が「自由化」され、また成果主義が取り入れられることによって、労働者のストレスが増大していること、企業の側も労働者の健康管理責任を強く求められていることなどを、判例を紹介しつつ明らかにされた。

吉田純助教授は、日常生活にインターネットが浸透することにより、情報の授受が簡単になった反面、公私を隔てる壁が流動化し、プライバシー問題という個人情報の商品化や政治・行政による個人情報の管理などのマイナスの側面が明らかになったこと、他方、個人が自由に参加できる開かれた場所としての「公共圏」という空間が作り出され、コミュニケーションの流れによって問題解決がなされる可能性が生じることにも言及された。

第2日目は、「場」は単なるスペースではなく、人間と人間が出会う場でもあり、また境界をなす場所でもあるので、人間によって意味づけられる空間の問題を、渚、都市、地球環境といった「場」を対象として考えていくこととした。

加藤真教授は、海と山、海と陸との接点をなす「渚」を取り上げ、そこに生息する生き物を紹介しながら、干潟の生物の豊穡さが水を浄化してきたこと、干潟の減少に伴い生態系が一変したことを、美しい写真を示しながら印象的に話された。

間宮陽介教授は、犯罪の温床となった米国の近代的なアパートの例から講演を始められた。公私共用空間や奥行きがなくなった都市がもつ問題点を指摘され、均質空間として投機の対象ともなる土地と、歴史や文化といったユニークさを維持す



る場所とを区別して、都市問題とは場所の土地化ではないかとされ、商店街や、家の内と外の境界が作り出す重複領域としての境界が都市にとって重要であると指摘された。

松下和夫教授は、2002年8月26日から9月4日まで、ヨハネスブルグで開催された「持続可能な開発に関する世界首脳会議」(WSSD)、通称「環境・開発サミット」に参加された報告を行われた。1992年の「地球サミット」から10年、環境条約は作成されたが、淡水資源の枯渇、地球温暖化、森林の減少や貧困の改善の遅れなど、「成果はあまりに少なく、取り組みはあまりに遅い」(アナン国連事務総長)という評価を紹介し、先進国と途上国の対立の場としてこのサミットを説明され、「実施計画」が作成され会議が決裂しなかったことは評価できるとされた。

2日間とも参加者は熱心に受講され、各報告者に対する質問も活発であった。受講者のアンケートを拝見する限り、常連の高齢者の方が多数を占めていたが、総合人間学部、大学院人間・環境学研究科のホームページを見て申し込まれた若い方

もおられた。残念ながら、受講生の数は44名と少なかったが、受講者の評価は、講義の内容・満足度いずれについても高いものであった。

今年度は、公開講座の準備と打ち合わせを早くから始めたにもかかわらず、広報(ホームページ掲載、ポスター作成と案内状の送付)が遅くなってしまった。公開講座の開催費用が単年度毎の配分になっていることにも原因するが、既に8年間継続して開催されている本公開講座は、おそらく今後とも開催が認められるであろう。次期の世話人には、早期の取り組みをお願いしたい。

なお、公開講座の運営に多大の協力をいただいた総合人間学部、大学院人間・環境学研究科事務部、とくに庶務掛のみなさんと、手伝ってくださった大学院生に対し、この場をお借りして感謝申しあげる。

(大学院人間・環境学研究科 環境保全発展論講座
にしい まさひろ)

(別記) 講義日程

9月17日(火)

開講の挨拶 京都大学総合人間学部長
宮本盛太郎

「16世紀朝鮮における
書院の場所 李退溪をめぐる」
京都大学大学院人間・環境学研究科助教授
西垣安比古

「働く場の変容を巡る法律問題 職場の
ストレスを中心として」
京都大学大学院地球環境学助教授
小畑 史子

「インターネット空間という場
情報社会の光と影」
京都大学総合人間学部助教授
吉田 純

9月18日(水)

「渚の生態系 汀線に沿って連なる
さまざまな生息場所の連環」
京都大学大学院人間・環境学研究科教授
加藤 真

「都市とは何か？」

京都大学大学院人間・環境学研究科教授
間宮 陽介

閉講の挨拶

京都大学大学院人間・環境学研究科長
江島 義道

「場としてのヨハネスブルグ・サミット」

京都大学大学院地球環境学堂助教授
松下 和夫

(司会)

京都大学大学院人間・環境学研究科教授
西井 正弘

総合人間学部創立10周年記念 公開シンポジウム

総合人間学部は、昨秋創立10周年を迎えました。これを記念し、下記のように公開シンポジウムを開催して、次の10年、20年を見据える視座を確立すべく、教官と学生ともどもに考える機会を持ちたいと存じます。ふるってご参加下さい。なお、休憩時間に、弦楽四重奏の演奏を予定しております。

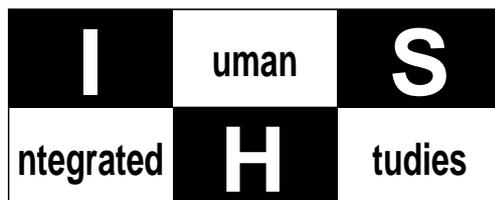
認知・計算・感情 総合人間学の可能性

総 長 挨拶

「ものの見え方」 船橋新太郎 (総合人間学部教授)
「計算論的世界観」 立木 秀樹 (総合人間学部助教授)
「感情は私のものか？」 菅原 和孝 (総合人間学部教授)

司会 / コメンテーター 篠原 資明 (総合人間学部教授)

と き 平成15年4月24日 (木) 午後1時30分～5時
と ころ 人間・環境学研究科 地下大講義室
主 催 京都大学 総合人間学部 Tel. (075)753-6504



編集後記

昨年、自宅の引っ越しの際に自分が学生時代の「教養部報」が、長らく開けずにおいてあった段ボールから出てきました。20年前の地味な装丁ですが、読み返しますと、今は退官された懐かしい先生がおられたこと、若かりし（老？）先生の留学記など、記録に留めておくことの大切さを実感しました。今年度最後の総合人間学部広報第33号もなかなかの出来上がりです。特集のタイトルは少し意欲的に「＜危機＞の時代の学問」。全く異なるのだけれど、それぞれの分野の第一線でご活躍の先生方から原稿を頂くことができました。こういう特集が組めるのも、またそれで一気に読めてしまうのも、うちの学部の良さであり、大学の大切な役割である、“ Liberal Arts & Sciences ” を実践できる部局は、全国でも少ないのだろうと思います。来年度から大学院重点化の組織替えで、この広報もどういう形になるのかわかりませんが、必ず読み返される時が来ることを信じています。

（田部記）

総合人間学部広報委員会